

たまのよこやま

新連載

かゆい所に手が届く

遺物の基本的な見方

平成27年度企画展示

絶賛開催中!!

かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方 石器編

◆石器はいつ頃から使われているのか

人類の歴史を知るためにいくつかの図鑑や参考書を見てみると、「猿人→原人→旧人→新人」というような文字や絵で表現されたものを目にするところがあるかと思えます。私たち現生人類は、新人（ホモ・サピエンス）を祖先として歴史を作ってきました。しかし、それ以前からアウストラロピテクスやホモ・ハビリス、ホモ・エレクトス、ネアンデルタールといった猿人や原人、旧人たちが、原始的な道具（石器を含む）を使って生活していたことも含めて人類の歴史ということが出来ます。

アフリカで活動を続けている研究者（人類学）たちは、それまで最古として知られていたオールドワン石器（約260万年前）よりも古い時期のものがあるのではないかと考えていました。そうしたなかで2011年にケニアのトゥルカナ湖西岸で発見された石器は、約70万年も一気に遡る約330万年前のものとなし、それらはアウストラロピテクスが作った可能性があるといわれています。

◆打製石器か磨製石器か

石器には石を叩いて作るものと磨って作るものがあります。最初から最後まで叩いて作るものを打製石器と呼んでいます。代表的なものには尖頭器や礮器、打製石斧、打製石鏃などが該当します。それらに対して磨って作ったものを磨製石器と呼んでいます。しかし、これは最初から磨って作り始める訳ではなく、完成形までは打製石器のように叩いて作り、最後の仕上げとして全体を磨って完成させたものなのです。代表的なものには磨製石斧、石棒、磨製石鏃などがあります。そして旧石器時代、縄文時代、弥生時代それぞれに双方の石器があり、特徴的な器種（種類）がみられるのです。

◆素材と石質

石器は川原石のような石の一部を加工して作る石器（石核石器）を除けば、そのほとんどが剥片という素材を加工して作られています。例えば、打製石斧を作るとき、その条件に合う剥片を大きな石（石核）から剥ぎ取ることから始まります。逆に言うならば、目的に見合う剥片が手に入らなければ石器は作れないということになるのです。このような石器

を剥片石器と呼んでいます。時代や石器の種類（器種）によって素材となる剥片の剥ぎ取り方は違ってきます。また、素材となる石の石質によって叩いた時の割れ方が変わるので、素材を手に入れることだけでも様々な条件をクリアしなければならないのです。

◆叩けば割れる？

石器の材料は石です。ですから石を叩いて割れば石器は作ることが出来る、と単純に考えてしまいがちですが、そういうものではありません。そこには科学的な法則があるのであります。

置いた平らな石の中央をハンマーを使って叩くとします。ハンマーがあたった瞬間、その力はあたった場所を頂点として円錐形に拡がりながら伝わっていく、といわれています。写真1をご覧ください。これは窓ガラスに何かがあたって割れた状態を写したのですが、何かがあたった点、つまり力が加わった点を中心に、その力が拡がっていった様子がよくわかるかと思えます。放射状に力の方向が、同心円状に力の波が伝わっています。窓ガラスですから平面的な拡がりのみせていますが、石器の素材を剥ぎ取る時にも同じ原理が働きます。しかし、相手は



写真1 割れた窓ガラス（リマド本舗ホームページより転載）

石です。ガラスのように均質でもなく平面でもありません。火成岩なのか堆積岩なのか、どのような鉱物などで構成されているのか、様々な要素が絡んでなかなか思い通りには割れないのです。観察し体験することを繰り返して、生きていくために必要な技術を体得してきたのです。

◆石を割ることで何が解るのか

いつからか日本では、石器製作の技術は途切れて

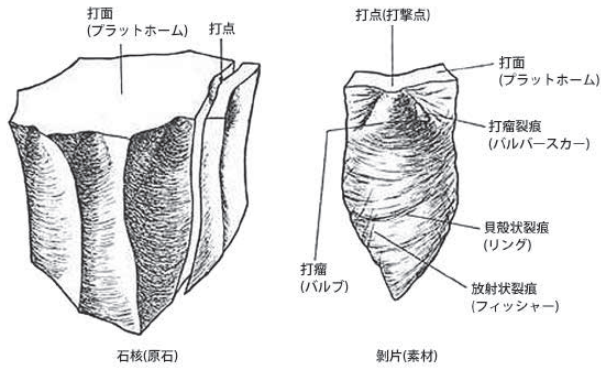


図1 石核と剥片（素材）および各部の名称

『図解 技術の考古学』より転載、一部改変



写真2 原石（石核）と剥離した剥片（北海道産黒曜石）

しまいました。それゆえ石器がどの様に作られたのかを知るために、遺跡に遺された石器などから復元して行く研究が試みられました。それには何よりも、様々な種類の石が、どの様な作用でどの様な割れ方をするのかを知る必要があったのです。

図1は石核から剥がされた素材（剥片と呼ばれています）の状態と、各部分の名称が解る模式図です。写真2も参考にご覧ください。その中で貝殻状裂痕（リング）と放射状裂痕（フィッシャー）は、写真1の窓ガラスでもみられた力の波と方向の痕跡として剥片に刻まれているものです。そして剥片を剥がした石核側は凹面（ネガティブ面）、剥片側は凸面（ポジティブ面）となり、ぴったりと重ね合わせることができることも重要な性質を持っているのです。

◆剥離と接合

石器は入手した剥片（素材）をさらに叩いて成形します。その際に小さい石のかけらがたくさんできます。それらも剥片と呼ばれますが素材と違って二度と使われることはありません。このような作業を繰り返して石器を完成させるのですが、剥片の大小にかかわらず剥片を作出することを剥離、剥片が生じた凹面（ネガティブ面）を剥離面と呼んでいます。

遺跡の調査（特に旧石器時代）において、大小さまざまな剥片が多量に集中する場所が発見されることがよくあります。石器を製作した場所の痕跡として認められていますが、単一種類の石質で構成され

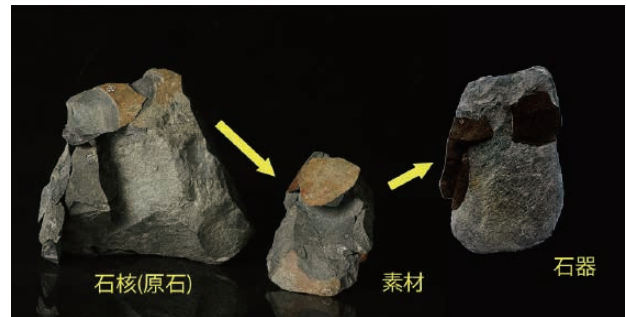


写真3 石器製作順序が解る接合資料（T. N No. 72 出土）

る場合や数種の石質で構成されている場合もあります。これらはここで作られた石器がどの様な素材、あるいは原石から作られたものなのかを知る絶好の資料で、多量にある同じ石質の剥片を集め、凹面と凸面がぴったりと合う剥片を探す作業をします。これを接合といいますが、まるで動画を逆再生するかの如く、素材や原石が明らかになることもあります（写真3）。こうした事例を数多く蓄積することによって、作る石器の種類の違いや使う石の種類の違いを踏まえた「流儀」、「流派」ともいえる石の割り方の違いが見えてくるのです。こうして石器製作技術が復元されるのですが、この研究は特に旧石器時代で進んでおり、「石刃技法」や「瀬戸内技法」、「湧別技法」などと名付けられています。

◆検証と課題

石器の研究は遺跡調査の成果による石器そのものの観察や実測をはじめとして、素材や原石、製作技術の復元など多岐にわたるものがあります。研究対象のすべてにおいて遺跡調査から携わり、一連のプロセスにも関わることができるならば、それに越したことはありません。しかしながら過去の調査資料に対してや全国各地の遺跡調査に参加することなど、なかなかできることではありません。そこで調査報告書の精査や実地踏査、実見などで必要な情報を得ることになります。時間のかかる地道な作業の繰り返しです。こうすることでデータを積み重ね仮説を立てることができるのですが、ここで止まってはいけません。その仮説で実際に石器を作ることができるのか否か、検証作業を重ねることが大切なのです。そして、これは当たり前のことですが、検証作業によってできた石器や剥片類は責任を持って管理、廃棄することです。過去に悲しい出来事がありました。私たちは絶えず自らを戒め、真摯な姿勢でいなければならないのです。（並木 仁）

御殿前遺跡は、古代の武蔵国豊島郡衙跡の発見された遺跡として著名です。豊島郡は、今の千代田・文京・台東・荒川・豊島・北・板橋・練馬・新宿区の区域にあたり、郡衙は、郡における行政上の中心機関がおかれていた所です。

発掘調査は、1983年の一次調査以来、調査成果が積み重ねられてきており、2013～2014年度にかけて行われた調査の成果としては、郡衙に伴う鍛冶工房跡の発見が注目されます。

鍛冶工房跡は、長大な方形の竪穴状遺構で、規模は長さ約14.1m、幅約4.9mあります。鍛冶作業に使われた炉跡は、6基確認されており、ひとつの長大な施設の中で、複数の工人達が作業をしていたと思われます。複数の鍛冶炉を同時操業させ、鉄器を集中的に生産する官営工房のことを「連房式鍛冶工房」と呼んでおり、今回発見された鍛冶工房跡もこれに相当する遺構と思われます。

鉄製品の出土量は少ないですが、刀子・小札（武器である掛甲を構成する板状の製品）などが見られ、鉄製品の仕上げに用いたと思われる砥石も出土しています。鍛冶作業に関わる遺物としては、フィゴの

羽口（炉の温度を上げる時に用いた送風設備の一部）の他、鉄床石（金属を加工する時に被加工物をのせる台）や鍛冶滓（椀形滓・鍛造剥片・粒状滓）がみられます。

特に、鍛造剥片（鉄製品の素材等を加熱しながら鍛打する時に表面から剥離したもの。5mm以下の微細なものが多い）および粒状滓が大量に出土しており、鍛錬鍛冶作業に関わる痕跡を顕著に認めることができます。また、鍛冶炉跡には、鉄床石の据付穴がセットで確認されており、工房内では、鉄床石を使用した鍛錬鍛冶が一般的に行われていたことがうかがうことができます。鉄床石を使う鍛錬鍛冶は、小型製品の生産に適しているといわれており、刀子や小札の出土はこの点を示唆しているのでしょう。

今回発見された鍛冶工房跡は、出土した遺物等の時期から、7世紀末頃には操業していたと思われます。この頃は、地方官衙に伴う官営鍛冶工房の初現期にあたりますが、その様相については類例が少ないこともあり、いまだ不明な部分が多く、今回の事例は、このような点を解明するうえで貴重な発見であるといえるでしょう。（西澤 明）



羽口



鍛造剥片



連房式鍛冶工房跡平面図 (1/120)、全景 (西より)



いま あの遺跡は現在！？ Vol.6

— 環状第2号線(新橋～虎ノ門間)

あたごしたいせき
愛宕下遺跡

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

新橋駅から西へ徒歩約10分、昨年6月にオープンした「虎ノ門ヒルズ」、そしてその下を走る「環状第2号線」「環二通り」があります。この道路は、1921年の旧都市計画を原形とし、戦後「戦災復興計画基本方針」で都市計画道路とされました。このためこの地区には戦後から建築規制がかけられ、都心では珍しく高層建築物が作られることがなく、その基礎等で地下に埋まった遺跡が壊されることなく残った場所でした。

2004年から2011年にまで及んだ調査では、

古くは縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物が出土しました。近世以前、この地は「日比谷入江」と呼ばれる湿地帯の一部であり、徳川家康の江戸入府後に埋立てられ江戸の町を形成します。絵図によると遺跡の範囲内には多くの大名、旗本等の屋敷地が建ち並び、それらに関連する遺物も見つかりました。また、埋立地であることから、地下水位が高いこの周辺からは、大量の木製品が良好な状態で出土しており、江戸時代の人々の生活を復元する上で重要な手がかりになります。(武内 啓)



写真1：調査前(2004年)の「環二通り用地」(左、赤線枠内)と、道路が開通した現在の様子(右)。右写真の中央手前には「築地虎ノ門トンネル」が、中央奥には「虎ノ門ヒルズ」がみえる。(左写真：東京都都市整備局再開発事務所提供)



写真2：呪句や梵字が書かれた呪符木簡(左)と出土遺構(中央)。「堀式部少様御や敷」と書かれた荷札木簡(右)。「堀式部少輔」は遺跡の一部に屋敷を拝領した上総荊谷藩初代藩主の堀直景を指す。(写真：東京都教育委員会提供)

大江戸掘りものの帖～ 10 ～

迷子のしるべ

宮部みゆきさんの短編ミステリー「まひごのしるべ」（『幻色江戸ごよみ』所収）。題名は、迷子を探す側、保護した側、双方の情報を寄せる標石「迷子石」に由来しています。日本橋の一石橋に現存する迷子石（都指定有形文化財）をはじめ各所に設立された背景には、大勢の人で賑わった江戸特有の都市問題があったとされています。それでは、大切な我が子が迷わぬよう、当時の親たちはどのような事前の対策を行っていたのでしょうか？

小説のなかでは、迷子を連れ帰った大工夫婦は、男の子の首に提げてあった迷子札から、その子の住所と親子の名前を知り得ています。

江戸の遺跡から出土する迷子札は、小判形をした真鍮製と思われる小札が一般的です。新宿区市谷薬王寺町遺跡5次調査で出土した金属の札には、「四ッ谷大木戸／田安やしき内／田嶋口太郎／娘口よ」（口は判読不明）の文字が、反対側には干支と思われる亥（猪）の絵が彫られています。他の出土例を見ても、記された内容は、片面に「住所（地名）＋親の氏名＋子の名前」、反対の面に干支の絵、とほぼ同様の組み合わせで、紐通しの孔が掘られています。『日本風俗史事典』（弘文堂）の「迷子札」の項では、「住所氏名などを彫った真鍮製の小判形の迷子札を、子供の帯などにつけておいた」とあります。市谷薬王寺町遺跡では、これとは別に「牛込区市ヶ谷薬王寺町三十三」の住所が記された近代の迷子札も出土しています。この真鍮製の小判形迷子札は、

江戸から近代を通じて、定番商品になっていたとみてよいでしょう。

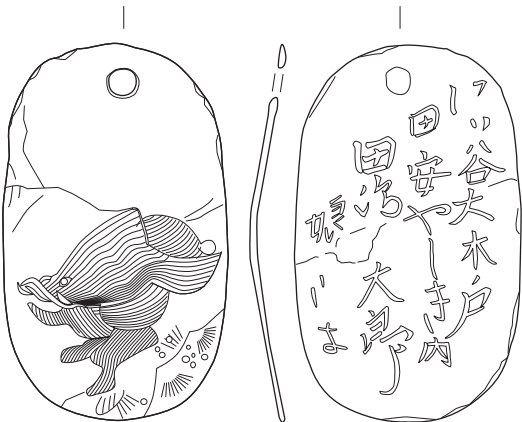
現在発掘調査中の新宿区四谷一丁目遺跡6次調査では、次の墨書が書かれた木札が旧四谷塩町一丁目の町屋跡から出土しました。

山形に切出された木札には「江戸四谷塩町丁丁目／鍋屋七郎右衛門娘／当年五ツ／貞享三年／□□□□月」、反対側には「四つ屋志ほ丁巷／なへ屋七郎右衛門／貞享三〇／丑〇月吉日」と、ほぼ同様の内容が表裏に記されています。上部には小さな穿孔があり、糸などを通して使用していたものと考えられます。内容（住所＋親氏名＋続柄＋年齢＋記載年月？）から見ると、これも「迷子札」とみなしてよいものと思われます。記された年代は貞享2年（1685年）と、管見の限りでは、江戸遺跡での出土例として最古のものです。定型化した真鍮製小判形タイプに先行するものとして、こうした木札が江戸前期には一般的であったのか、あるいは父鍋屋七郎右衛門のお手製であったのかも知れません。

愛しい我が子の安全を願う親心が伝わってくるように思えます。（大八木謙司）

【謝辞】墨書の判読には、学習院女子大学の岩淵令治教授にご協力いただきました。

【参考文献】宮部みゆき『幻色江戸ごよみ』（新潮文庫、1998年）、東京都埋蔵文化財センター『市谷薬王寺町遺跡Ⅴ・市谷柳町遺跡Ⅱ』（当センター報告第292集、2014年）



金属製の迷子札【新宿区市谷薬王寺町遺跡5次調査37区一括・実寸】

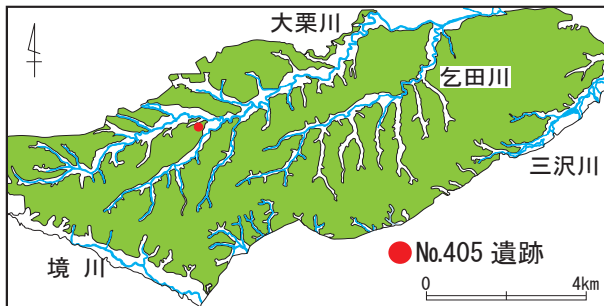


迷子札と思われる墨書木札

【新宿区四谷一丁目遺跡3-2区155号遺構出土（S-3/4）】

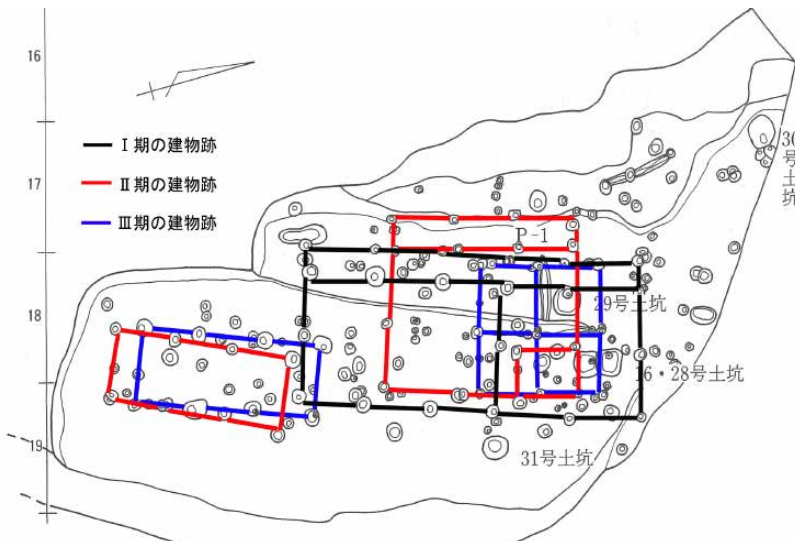
京王線堀之内駅から北へ10分ほど歩いたところにNo.405遺跡があります(八王子市松木)。現在は商業施設やマンションが建つ近代的な町並みですが、発掘調査した当時は、まだ農村的風景を残していました。本遺跡からは、縄文時代、古代、中世、近世の遺構・遺物が発見されていますが、今回は中世の遺構・遺物について紹介します。

中世の遺構が発見されたのは、近世の初めに創建された教福寺という、明治時代に廃寺になったお寺の遺構の下からです。このお寺を造る時に土砂を厚く盛り整地していたため、中世の建物跡が近世以降の影響をまったく受けない状態で検出され、当時の姿を極めて良好に示していると考えられました。



No. 405 遺跡の位置

建物跡は、大きく3時期あり、各時期の建物が、大型の建物と小型の建物が1対で建てられていたことが分かりました。この建物跡は、出土遺物から13



No. 405 遺跡遺構全体図

世紀半ば以降、14世紀末までと考えられています。

多摩ニュータウン地域では、中世遺跡が多く発見されています。No.405遺跡の調査以前にも、大型と小型の建物が対で造られていたと考えられていましたが、本遺跡の調査成果で、それが確実となり

1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

27 多摩ニュータウン No. 405 遺跡

ました。

当地域の中世遺跡は、12世紀中頃の漆器(木器)製作跡が発見されており、中国製の白磁や青磁と常滑窯・渥美窯の甕などが出土しています。手工業生産に携った領主的階層の遺跡と考えられています(No.493

遺跡)。12世紀後半から13世紀初めの遺跡としては、廃寺跡(No.692遺跡)と鎌倉幕府御家人の屋敷跡とされる遺跡(No.22遺跡)も調査されており、鎌倉幕府創建に関わった地域としての特性が現れています。何よりも特徴的なのは、13世紀前半から14世紀前半の遺跡で、多くの一般的集落が調査されていることです。どの遺跡からも中国製の青磁碗と常滑窯の甕・捏鉢などが出土します。建物は、No.405遺跡で分かった大型と小型の対をなすものです。また、No.405遺跡が所在する八王子市松木地区では、この時期の遺跡が、丘陵の裾部に200~400mの間隔で点在することが分かりました。

これらの遺跡から出土する遺物は、当地域が、鎌倉に大きな権力が存在した時代(13世紀前半~14世紀前半)に、その権力が持つ、陶磁器などの流通の枠の中にいたことを示しています。また、その遺跡の立地や建物跡などは、個々の遺跡が独立した姿をも示しています。当該期の当地域は、ある程度豊かな経済的背景に支えられた、自立した人々の生活があったと考えられます。

No.405遺跡の調査は、1/964の調査ですが、964の遺跡の調査成果を繋げ、地域の歴史を明らかにしたいと思っています。(福嶋宗人)

『先祖と生きる - 暮らしとお墓のうつりかわり -』にまつわる話 (そのに)

「昔、先祖が苦勞したので、正月の餅は搗かない。食べない。」という家や一族が日本各地に点々と存在することが知られています。その理由として最も多いのは、「昔、先祖が戦に敗れて逃げて来たのがちょうど歳の暮れだったので、餅を搗くことができなかつた。」というものです。そして、もしこの戒めを破れば、臼から火が出たり、身内に良くないことが起こったりすると伝えられています。

では、これらの家々が正月に餅の代わりに何を食べているかといえは、それは里芋、牛蒡、人参、大根などの雑煮、ということになります。特に里芋は重要で、かつてこの点に注目したある民俗学者は、里芋（ひいては焼畑文化）を餅（ひいては稲作文化）と同等、かつこれに先行する日本文化生成の構成要素として重要だと考えました。この焼畑文化への注目は、当時話題となった照葉樹林文化論などと相まって、それまで、日本文化を論ずる際に前提とされてきた「稲作に基づく日本単一民族国家論」という枠組みを再考させる契機の一つともなりました。

この研究者によれば、「餅なし正月」は稲作文化の受け入れを拒否した習俗で、加えて「餅搗かぬ家」は焼畑文化の伝統を保持している家、ということになりそうです。現在では、正月に食べる餅を入れた汁物を一般に「雑煮」と呼んでいます。元来は里芋や人参や大根などの畑作物を雑煮に煮込んだがゆえに「雑煮」だったわけで、この雑煮（焼畑農耕文化）に、後世新しく餅（稲作農耕文化）が入るようになった、というわけです。これが、中身が餅を中心としたものになったにもかかわらず、現在でも、私たちがこの汁物を「雑煮」と呼ぶ所以です。

日本における焼畑農耕と稲作農耕の関係や評価に



里芋の栽培



稲の栽培

ついてはともかく、現在の日本文化が成立する上で、畑作物が重要であったという点は確かでしょう。そして、「餅なし正月」にみられる食べ物が、その一端を示しているという指摘も正しいと思います。しかし、そのことと「餅なし正月」の習俗や「餅搗かぬ家」が、歴史上、稲作文化を拒否してきたその残存例だと考えることを同日に論じてよいかどうかについては、一考の余地があると思っています。

実は多摩丘陵にも「餅搗かぬ家」が存在していません。搗かない理由は「敗走して現在の村に落ち着いたのが歳の暮れで、餅を搗く米も余裕もなかつた」というもので、これは全国各地の「餅なし正月」に見られる典型例と一致します。この先祖（家）が寛永2年にすでに当該の村にいたことは古文書で確認できます。そして、一族内では村社の建立に当たって土地を提供したと伝えていますが、先の文書にも建立を取り仕切った「代官御名主」として、この先祖の名前が出てきます。つまり、この先祖（家）は村の草分け的な存在であり、かつ氏神（村社）の祭祀に深く関わっていた可能性が考えられるのです。他には、足立区の「餅搗かぬ家」であるT家など4家も、「戦に敗れて年末に逃げて来たその頃の先祖の苦勞を憶んで餅は搗かない」と伝えていますが、この先祖も同区旧四ツ家地区の草分けです。

全国の事例を検討していないので想像の域を出ませんが、これら都内の旧家一族が、現在でも正月に餅を搗かず、食べないのは、当時（中世以前？）から極めて貴重であり、かつ正月に真っ先に氏神に捧げるべき神聖な食物である米（餅）は、その祭祀を司る家柄の人間はこれを口にしてはいけな、という戒め（物忌み）からではないか。すなわち、「餅なし正月」は米よりも里芋などの畑作物を重要視するという米に対する否定的な習俗ではなく、ましてや稲作文化以前の焼畑文化の伝統を延々と保持してきた証拠でもなく、逆に米を重要視・神聖視したがゆえの、限られた家とその子孫に課せられたタブーの所産だったのではないのでしょうか。（福田敏一）

【表紙解説】 新宿区四谷一丁目遺跡の麴室群（『たまのよこやま』101の遺跡だより参照）。四ツ谷駅付近には、江戸時代の初め、酒や味噌のための麴菌を培養する多くの麴室があったことが分かりました。

